



「日本気候百科」

日下博幸・藤部文昭・吉野正敏・

田林 明・木村富士男 編

丸善出版, 2018年1月

516頁, 20,000円(税別)

ISBN 978-4-621-30243-9

「名は体を表す」。昔の人は本当によく言ったもので、本書の内容はまさに「日本の気候の百科事典」である。

特筆すべきは、47都道府県すべての気候が解説されているところ。気候、その土地の産物、伝統、さらには近年の気象災害まで、気候がもたらす恵みと脅威という二面性がひとつながりで理解できるように書かれている。しかも、関東の内陸で夏の暑さが厳しいとか、冬の日本海側で豪雪になるとか、そういう誰もが知っていることだけではなく、冬の三重県を吹き抜ける鈴鹿おろしや、フィギュアスケート発祥の地といわれる宮城県の五色沼など、住んだことのある私自身も納得するほど、地元で知られる情報がちゃんと盛り込まれている。いわゆる「地元ネタ」を逃さない。地元の肌で感じる気候特性が、第三者の目で冷静に分析されることで、その場所の空と大地が立体的に立ち上がる。

第三者が冷静に、というのは重要な特徴だ。たとえば岡山県の頁をめくると、「晴れの国おかやま」における気象災害についての記述があり、これまで幾度となく台風の被害を受け、さらには豪雪でもしばしば人的被害を出してきたことがつづられている。本書の執筆・発行は、平成30年7月豪雨よりも前。第三者の冷静な目には、「晴れの国」が気象災害と無縁ではなく、むしろ浸水などへの備えが必要であることが、前もって見えていたのである。ちなみに本書によると、「晴れの国おかやま」の根拠は、日照時間が多いことにあるわけではない。岡山市における降水量1mm未満の日数の平年値が全国でもっとも多いという事実由来する。日照時間で見れば瀬戸内地方には他にも多い場所がいくらかでもあるのだ。そんな冷静な「事実」が、そこかしこに散りばめられている。

少々厚みと重みのある本を初めから順に読むのはな

かなか骨だが、本書の場合は第II編「日本各地の気候」の中から自分の気になる都道府県から読めばよい。それすら気の進まない読者はコラムから読み始めれば、気候の世界へ自然といざなわれる。かくいう私も第I編「序章」は最後に読んだ。

すべての項目は短く簡潔に解説されている。そのため勉強熱心な読者は物足りなく感じるかもしれないが、より詳しく知りたい場合はそこに記されたキーワードを元にさらに探索をすればよい。言わば辞書を引くための辞書である。

各都道府県の気候を知り、その気候を形作る物理過程を知りたくなったら、第IV編「気候をより深く理解するために」が手助けしてくれる。第IV編は特に、地域ごとの気候が変わる大きな要因となる「風」に着目している。どうして風が吹くのか、風が吹くとどう気候が変わるのか、気候によって風がどう変わるのか。「風」を理解できると、日本という起伏の激しく海に囲まれた国土だからこその気候多様性も得心できる。そしてもちろん、この第IV編においても本書は手掛かり集である。より深く知りたい読者は、そこに含まれる用語を手掛かりに専門書を当たればよい。

さて、この書評は約1,600字で書くことになっていて、だいたい物事というのは1,000字も書けば用を足せるが、最後にもう一つ加えるとすれば、本書は実は気象キャスターにとってかなり有用だということである。テレビに出演する気象キャスターというのは、大抵の場合、出身でもなければ住んだこともない場所で働くことになる。私自身、愛知県出身でありながら三重県や宮城県、それに栃木県や千葉県へ脈絡なく転勤して気象情報を担当してきたが、決して珍しいケースではない。そんな気象キャスターという職業にとって、本書の情報は強力な味方になりそうだ。さらには、よく知る地域でも改めてネタを探すと苦労する。私も愛知県の気候なら任せて！と言えるかということもなくて、第三者の視点というのは地元民にとって意外で発見に満ちていたりする。本書を手にとった読者は、画面に映らないところで四苦八苦するキャスターたちの日常にも思いを馳せてみると、違った楽しみが見えてくるに違いない。

(オフィス気象キャスター株式会社・NPO法人気象キャスターネットワーク 竹下愛実)